

## 漱石『こころ』の真髓一二つの遺書

Junko Higasa 2015.3.15

漱石は人の「こころ」を語るにあたって、二重の仕掛けを施した。それが「Kの遺書」と「先生の遺書」である。Kの遺書の意味を掴めなかった先生が、最後にその意味を自分の遺書によって明らかにする。

Kは「薄志弱行で行く先の望みがないから死ぬ」という理由と、世話になった礼と後始末を頼むとだけ書いたが、そこにあるのは「信頼して心を打ち明けた者を信じられなくなった悲愴」である。それに気付かなかった先生は、信頼して心を打ち明ける約束をした「私」に話す機会を失ったことで、Kの想いを知る。

「薄志弱行」とは、先行き人を信じていける自信がなくなったから死ぬということであり、礼は「友情」自体への感謝と決別である。後を頼んだのは行き場のない「友情」を葬ってくれという願いである。

かつて叔父に裏切られ、自分だけを頼りに生きて行こうとした先生は、それを忘れて「私」に心を委ねて裏切られた。親を欺いてまでも自分だけを信じて進もうとしたKは、それを忘れて先生に心を委ねて欺かれた。それは「分割した幾つかの三角形に向きを付けた時、全体が同調するようには出来ない」という人間の心のメビウスの輪である。一つの三角形が表を向けば、もう一方は裏を向く。その幾重にもねじれてつながる輪のように、人の「こころ」は永遠の「矛盾」を抱えて「罪」を背負っていく。